

---

# 魔法少女まどか マギカ ワールドオブメシア

ハジケ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女まどか マギカ ワールドオブメシア

### 【NNコード】

N9733Z

### 【作者名】

ハジケ

### 【あらすじ】

これはとある世界の一人の青年が魔法少女まどか マギカの世界に行くお話です。

## 青年と少女の恋愛（前書き）

作者「自分が考えたオリキャラ剣舞がまじかマギカの世界に行つた  
いと詫ひ話です。」

## 青年と少女の出会い

「」はとある世界、「」の世界に居る超天才科学者の所に一人の青年  
・剣舞が来ていた。

「チャタイン? 何のようだよ?」

「実は君に調整が終わつた次元転送装置の実験台になつてほしいんだ。」

超天才科学者のチャタインはメガネをクイッと上げながらそう言つ  
が。

「嫌だよ。」

剣舞にあつたり断られてしまつた。  
チャタインは剣舞に断る理由を聞く。

「何故嫌なんだい?」

「だつてチャタインの装置の実験台つて大抵ろくな目にあわないつ  
て聞くし。」

剣舞にそう言わるとチャタインはニタア…と笑いながら剣舞にこ  
う言つた。

「大丈夫、今日は発信器も着けるから。」

「んー……じゃ、いつか。」

発信器をつけると聞いて剣舞はあっさり実験台となる事を了承した。

「よしじゃあ発信器をつけるよ。」

「えへ。」

チャタインに小型の発信器をつけられる剣舞。発信器をつけ終わるとチャタインは剣舞に次元転送装置に乗るようになりた。

「じゃ、早速乗つてよ。」

「分かつたぜ。」

剣舞は次元転送装置の上にチャタインに言われた通り乗つた。すると…

バチッ、バチッ

「チャタイン…変な音が聞こえんだけど?」

「…ダメか。」

「何じゅそりやあーーー!?」

ブウウウウン…。

「まつ、発信器があるから探せるし別にいいや。」

金髪の中学生…田[タ]マリは驚いていた。

…急に田の前に現れた剣舞に対して。

「あ、あの…貴方は一体…？」

グウウ~

「腹減つたな…。」

「…………じゃあ家で」飯を食べますか？」

田マリは何故自分がこんな事を言つたかは分からぬがとりあえず田の前の青年…剣舞が本当に腹を空かせた顔をしていたからだろう。

「いやー、マジでありがたいぜ。飯を食わせてもらひつてよ。」

「いえ…私も誰かと一緒に食事が出来て楽しかったですから…。」

剣舞はそれを聞くとキョトンとした顔で田マリを聞いた。

「何だお前、友だちいねえのか?」

剣舞のその言葉はマリの胸にグサッと刺さった。

確かに自分が誰かと一緒に食事を出来て楽しいとか言えばそつ相手は考えるだろうが。

「じゃあ俺が友だちになつてやるよ。」

「えっ！？」

彼は今なんて言つた…自分と友だちになれる…と言つたのかと田中アリは耳を疑う。

「いきなり会った人と友だちになるなんておかしいですよ?」

「じゃあ、お前がいきなり会つた俺に飯を食わせたのもおかしいん  
じゃねえか？」

マミの言葉に剣舞がそう言い返すといの場の空気がシーン…つとなつたあと剣舞とマミは笑いだした。

「いいふうだー。ううですね…あと私はお前じやなくて田中マリです。

L

「おお、悪戯が好きだね、さじ。」

剣舞は軽くかうひました。すると田中アマノが顔を赤くする。

「男の子が女の子を名前で呼び捨てにするのは友だちって言うより

も恋人だと思いますけど……？」

「うーん……でも俺は基本、人の事は名前呼びで呼び捨てだしな……。」

剣舞がそう唸りながら「マミはクスッ」と笑いながら剣舞にこうつ  
言つた。

「別に名前呼びでいいですよ？…その変わり私も貴方の事を呼び捨て  
にしますよ。…えっと貴方の名前は？」

「俺は刀刃剣舞って言つ名前だぜ。」

「変わつた名前ですね。あつ、気にさわつたらすみません…。」

マミは剣舞の名前が変わつてるとつに言つてしまつたが、その事を  
謝る。  
だが剣舞は笑いながらこうつ言つた。

「おひ、変わつた名前だる。でも格好悪くはないだろ？」

「確かにそうですね…ふふつ。…所で剣舞が持つてるその刀は玩具  
ですか？」

剣舞はそう聞かれるとこう答えた。

「本物だけど？」

「銃刀法違反ですよー！？」

「マミは剣舞に対してもう言つた。確かに正論だ。」

そして剣舞は俺の世界じゃねえから本物とか言つたらダメだつたか  
と思ったが既に遅い。

「あー……ちよつと警察とかに会うのは待つてくれ、事情を話すから  
ね。」

「事情……？」

剣舞は自分の世界の事や自分が何故急にマリの田の前き現れたのか  
を話した。

するとマリは少し疑いながら剣舞に聞く。

「本当ですか……？異世界から来たなんて……。」

「つさ、マジだぜ。」

「信じるわ、友だちだもの。」

「ホントかー？サンキューな、マリ。」

剣舞は迷いのない澄んだ目でマリの田を見つめながらやう言つた。  
剣舞に田を見つめられたのでマリは顔を赤くする。

剣舞はマリの手を握りながらマリが自分を信じてくれた事を喜ぶ。

「なにだよー。マリ。」

「剣舞、手……。」

マリは剣舞に手を握られた事でドキドキするが、剣舞はそんなマリ

の気持ちは知りもしなかった。

「ナリだ、マサナガは家に泊まるのは悪いから、俺、今夜野宿する場所探してくるわ。」

「親に許可をもらつてくるからここわよ剣舞。」

「ホントかー……でもせきはまー……よし俺、さみすて宿にするわ。」

「

剣舞がさつまつと暗い顔をした。

「友だちがこままでまつて断るの……？」

「急にそんな暗い顔してどうしたんだよ……って何で急に泣出すんだ!? 分かったよ、家に泊まるから泣き止んでくれー!?」

剣舞が必死にさつまつと泣き止みでの泣き顔が嘘であったよううに笑顔になつた。

「じゃあ、決まりね。剣舞は私の部屋で寝てこいわよ。」

「嘘泣だったのかよー!?。」

「いつて剣舞はマタニ家の泊まる事になった。

夜…マミの喫屋で剣舞とマミは同じベットで寝ていた。

最初は剣舞は『床で寝るよ』と言っていたがマミが『床はダメよ』  
いから、ベットの方が柔らかくて気持ちいいでしょ?』と言ったからだ。

「人が側にいるのって落ち着くな。」

マミは剣舞が隣に寝ている事で安堵を得ていた。

一方剣舞は。

「スー……スー……。」

気持ち良さそうにグッスリと寝ていた、マミはそれを見て少し不機嫌になる。

「こんなかわいい女の子が隣に居て剣舞は何で緊張しないんだろ…  
もつとくっしちゃえ!」

マミは自分の体を剣舞に密着させる。

そつすれば剣舞は少しばかり自分を意識するのでは?と思つたからだ。  
マミが体を密着させると剣舞はマミを抱きしめてきた。

「えつ…！」

「兄ちゃんの布団にまた入ってきたのか…仕方ないなあ…一緒に寝  
てやるぞ…スー…。」

どうやら夢を見てマミを抱きしめたようだ。

剣舞に抱きしめられたマミは顔を真っ赤にして氣絶してしまった。

しかし…剣舞はそんなマリの様子を知るよしもないのです。

## 青年と少女の恋愛（後書き）

作者「この話について感想くるかな？」

## キレる剣舞（前書き）

作者「青年と少女の恋愛」の続編ですー。」

## キレる剣舞

次元転送装置による事故で別世界に飛ばされた青年、剣舞は偶然出会った田村マリの家で世話になっていた。

そして現在、彼は何かを作っていた。

「アーラーんと…よし出来た！」

剣舞は自分の作っている物が完成すると、学校に行こうとして玄関にいるマリの元に向かう。

「アマリ、これせるよ。」

「これ…？」

剣舞はマリ丸くてかわいい見た目の動物の木彫りの人形を渡した。

「世話になつてるからなプレゼントだ。それともやつぱり木彫りの人形なんかじゃ嬉しくねえかな？」

剣舞がそう言つとマリは剣舞から渡された人形をギュッと握りしめ首を横に振る。

「アーラーん…とっても嬉しいよ、ありがとう剣舞。」

「やつか、よかつたぜー学校に氣をつけて行けよ、マリ。」

「うん、行つてぐるね、剣舞。」

マミは剣舞に見送られ学校に向かつのだつた。

マミが学校に行くのを見たあと剣舞はある事を考へていた。

「マミ、両親に俺が泊まる許可を取つて言つてたけどこの家にはいないよな…両親は別の所に住んで電話で許可取つたんかなあ？」  
「いっか。」

マミはマミの事情があると思い、深くは詮索しない剣舞であつた。

場所は変わつてマミの通う学校。

マミは休み時間に剣舞から貰つた人形を見つめ笑顔になつていた。  
人形を貰つた事が嬉しかったのだろう…厳密に言えば誰からプレゼントを貰つた事がマミは嬉しいのだが。

「何二ヤ二ヤしてんのよ?」

マミが人形を見つめているとクラスの女子の一人がマミに話しかけてきた。

「えつ、いや別に…。」

「何その人形？ちょっと貸しなさいよ。」

クラスの女子はマミからそつと人形を奪い取った。

「あっ！？返して！」

「こんな人形の何処がいいのかしら…」うしちやえー。」

人形を奪い取ったクラスの女子は人形を床に落とすと人形を踏みつけた。

「止めてよ！？その人形は大切な物なの！」

「大切な物ねえ… そう聞くと壊したくなつたわ！」

クラスの女子はそう言つと人形を連續で踏みつけ壊した。

マミはそれを見て絶望にまみれた表情をしたあと急に怒りが込み上げ人形を壊した女子を突き飛ばす。

「痛つ…何すんのよ！もう怒つたわ…あんたちょっとついてきなさい。」

「えつ…！？」

マミは人形を壊した女子にある場所に無理矢理連れて行かれる。

女子が集めた複数の男子とともに…。

人が寄り付かない教室…マミは人形を壊した女子が集めた複数の男子に囲まれていた。

「本当にこいつ犯っちゃつていいのかよ？」

「ええ、構わないわ。」

「いい体してんなあ…たまんねえぜ！」

男子の一人がそう言つとマミは体をビクッと震わせる。

自分がこれから何をされるのか恐怖しているのだ。

「天涯孤独の奴がどうなると誰も悲しまないわ、さあ犯つてしまいなさい。」

人形を壊した女子がそう言つと野子の一人はマミを押し倒し覆い被さる。

「へつへつへ…まずは俺からだ！」

（助けて…剣舞くん。）

「届くはずがない…そう思つてはいたががマミは剣舞に助けを求めた。

しかし届くはずがないと思つていたマミの想いとは裏腹に…

「お前がマリマリで向かってたの？あとマリ、お前俺に助けを求めたか？」

マリの思っては届き劍舞はマリを助けにきた。

人形を壊した女子とその女子に集められた男子達は剣舞が急に現れた事に驚いていた。

「何処から来たのよあんたー？」

「瞬間移動でここに来たけど…それよつも…」

剣舞はマリの上に覆い被さつてこる男子に近づき。

「マリ、嫌がつてこじやねえか…離れや。」

剣舞は急に柔らかに霧囲氣から鋭くペニコした霧囲氣になつてマリに覆い被さつている男子にそつ言った。

だが男子はへりへりしながら剣舞に言葉を返した。

「離れやつて言われて離れると思つてのかよ？」

男子がそつと剣舞は鋭い目付きになつて言った。

「もう一度だけ言つ…離れや。」

「嫌だ…ねつー？」

嫌だと言った瞬間、男子の顔面に剣舞の拳がめり込んでいた。

そして男子はそのままふき飛ぶ。

「な、何なのよあんた！？」

女子にやつされると剣舞は、ハツキリとこいつ答えた。

「マリの友だちだ！」

「天涯孤独のこいつに友だちがいたのー？」

剣舞は天涯孤独と言葉を聞くとピクッと反応する。

「天涯孤独…？」

「こつは事故で両親を無くしてんのよーしかも自分が生き残つてんのよ、笑えるわ！」

剣舞は女子の言葉に怒りを覚えつつもマリの方を振り向いた。

「マリ…じゃあ、あの時の両親に許可を取るのは？」

「めんなさい…剣舞に余計な氣を使わせたくないで…。」

マリが申し訳なさそうに手と剣舞はマリの頭の上に手をポンッと乗せる。

「謝んなくていい…だって俺に氣を使わせたくないで嘘をついたんだろう？…俺の方こそマリに氣を使わせて『めんな』。」

剣舞はそつ言ひてマリの頭をわしゃわしゃと撫でた。

マリは頭を撫でられて思わず赤面していった。

「で、お前じまじま句をじみつとしていた……。」

剣舞は威圧を漂わせながら女子と男子達にそつ言つた。

「そいつが人形を見て一ヤ一ヤしてムカついたから男子達を使つてメチャクチャにしてやひつと思つたのよ……。」

女子のその言葉を聞くと剣舞の立つて居る地面にヒビが入り、破片が宙にと浮かぶ。

「ただ……それだけで……？それだけの理由でマリを苛めたのかあ……！」

剣舞がそつ怒鳴ると部屋中に細かなヒビが入る。

女子と男子達は何が起つた?と辺りを見回していた。

「何かよく分からぬけど、あんたもムカつくわ!あんた達まづは、あいつをどうにかしなさい!」

女子がそつ言つと男子達は剣舞を囲む。

「こ」の人数に勝てると思つてんの?どうやってこに来たか、分からぬえけどその方法を瞬間移動とかイタイ事を言つて居る兄ちゃんよ。

「

「俺、りよひ年上っぽいのこマジ、中一病じやね？」

「俺はボクシングやつてるんだぜえ？」

男子達は色々剣舞に向かって言つたが剣舞は男子達の言葉に耳を貸さず、主犯格の女子を睨みつける。

「無視してんじゃねえ！」

男子の一人がそう言って剣舞に殴りかかるが剣舞はそれを軽くかわし顎に掌底を食らわせた、男子はグラッと揺れると氣絶する。

「お、俺はボクシングを…」

男子の一人が何か言いおえる前に剣舞は見事なストレートをその男子に叩き込む。

「ボクシングをやつてるわりにや構えがなつてないな。」

「何だよこいつ……うわああ……」

男子の一人はナイフを取りだし剣舞に突き刺そうとした、…だが。

「切れ味の良くない、ナイフだな。」

「えつ……！……？」

ナイフは剣舞に突き刺さらずに折れてしまっていた。

男子はそれを見ると怯えた表情をして部屋から逃げ出さうとする。

しかし剣舞はそれを見ると手を男子の向かう方向のやや先に向け。

「はあっー。」

軽く気を放ち牽制した。

男子は自分の皿の前の地面がビビだらけになつた事に怯え地面に饼干をつめ、シヨンベンを漏らす。

「他の奴らもかかつてくんのか?」

剣舞が残つた、男子達にそつまつと男子達は下を向き、ただ震えていた。

それを見ると主犯格の女子に剣舞は近づいていく。

「『』『』めんなさいー・もひしませんからー。」

女子は剣舞に向かつて謝るが剣舞は怒りの表情を変えずに女子に近づく。

「謝るのは俺にじゅねえ…マリだらうが!」

剣舞はそつまつと拳を振り上げる、そしてその拳を…主犯格の女子にではなく女子のすぐ後ろの壁に叩きつけた。

すると壁は粉々に消し飛ぶ。

それを見た女子は、歯をガチガチとさせながら怯え地面に腰を落とした。

「お前なんか殴る価値もねえよ……。マリ、帰れや。」

剣舞はそう言つてマリに近づき歩を引いて起き上りせよとするが、マリは恐怖で腰が抜けている為、立ち上がりれない。

剣舞はそれに氣づいてマリをお姫様抱っこと形で抱き抱えた。

「えつー…ひよつ…剣舞…」

マリが何かを言おうとした時に剣舞は額に指をあて、瞬間移動をする。

瞬間移動した剣舞はマリの住んでいる場所の近くに移動していた。

「悪いな、マリ。俺の瞬間移動は誰かの気を感じて移動するから家の近くまでしか来れねえんだ。」

「剣舞…貴方つて凄いわね。」

瞬間移動した剣舞に対してもマリは思わず笑つたが、当の剣舞はキヨンとしていた。

「くつ？何が？」

「…それよりも私、まだ学校終わってなかつたんだけど…。」

「マリ、いつから、剣舞は焦った顔をして流れてた。

「えつー・わ、選い…」

剣舞が謝りながら笑った。

「俺も学校サボるか。」

「俺も学校サボってたな～。」

マリがサボると同時に剣舞は自分も学校を時々サボってた事を思い返してた。

マリはそんな剣舞を見てこう言った。

「私はそんなにサボってないですか？」

「確かにマリはあんまサボりそこねえな、マリー。」

剣舞はマリを罵倒しながら笑うと笑うが止まらなかった。

このあと一人は喋りながら家へと帰路を歩む…そしてマリの中には剣舞に対する特別な感情が芽生えていたのだった…。

## キャラ紹介（前書き）

作者「キャラ紹介です。？？？は終盤に出るかもしれません。」

## キャラ紹介

### 刀刃剣舞

異世界から魔法少女まどか マギカの世界からやつて来た青年。

彼の世界は色々な世界と繋がって成り立っている。

彼の見た目は茶髪の少しつんとした髪に整った顔。

服装は、白のシャツに灰色の革ジャケットに黒い革のズボン。

身長は179cm

戦闘能力は非常に高く、技や特殊能力も持っている。

性格はフレンドリーで明るい親しみやすい性格。

ただし誰かの為にキレると言葉が少し鋭くなる。

？？？

終盤で出るかも?たこ焼き屋を営んでおり、彼の作るたこ焼きは絶品。

変身型の宇宙人である。

見た目はハゲ頭のいかついオッサン。

因みに母親はでべそ。

## キャラ紹介（後書き）

作者「？？？」の特徴はある人と似てるかも…。  
」

## 万引きはいけねえぜ？（前書き）

作者「文章力もつと上げなきゃな…。」

## 万引きはいけねえぜ？

剣舞は現在、散歩をしていた。

特に理由も無く、ただ気まぐれに歩いているだけである。  
因みにマリには散歩してくると剣舞はちゃんと言っている。

「たまには散歩もいいよな。んつ？」

剣舞は散歩をしていてる途中で八百屋の前でキヨロキヨロしている赤  
髪の長髪の少女を見つけた。

明らかに様子が変だと剣舞は分かった。

少女は店員の注意がそれると店のリンクを素早い動作で取った。  
要するに万引きだ。

少女はそそくさとその場を離れようとするが。

「待てよ。」

「…? …。」

剣舞は少女を呼び止める。  
すると少女は動搖した表情を見せた。

「万引きはいけねえぜ？そのリンクは八百屋のおっちゃんに謝って  
返さないとな。俺も一緒に謝るからさ。」

「お前、何言つてんだ！？」

少女は剣舞が一緒に謝ると言つた事に驚いた。  
何故なら剣舞は少女にとつては赤の他人だからだ。

「せり、行くぜ。」

「ちよつー?」

剣舞は少女の手を引いて八百屋の店員の所に向かつ。そして剣舞は店員に向かつて勢いよく頭を下げ謝った。

「済みませんでした!」

「なつ、何だい急に?」

店員は急に剣舞が謝つて來たので何がなんだか分からぬようだつた。

「この子が店のコンパンを取りてしまつたんですけど、腹が減りすぎたからつこやつてしまつたと思つんです。だからどうかこの子を許してください!」

剣舞がそつ必死に謝ると店員は店長に声をかけた。

「店長、この青年が何かこの女の子がうちのコンパンをとつてしまつた事について謝つてきたんですけど…。」

「コンパンをもうひとつそれをこの兄ちゃんに渡して店の前から消えるように言へ。」

店長は泣い声でそう言つた。

店の前から消えるように…つまつ許してくれたと申つ事だらけ。

「よかつたな!許してもらつて!」

「こや、お前しか謝つてねえじやんか…。」

確かに許してもらつただろ？が謝つたのは万引きをした少女では無く、剣舞だけだった。

しかし剣舞は…

「まあ、許してもらつたから別にそんな事はどうでもいいじゃねえか？それよりも万引き何でもうするんじゃねえぞ。」

剣舞はやつと少女の頭の上に手を乗せて、わしゃわしゃと撫でた。

「！？… 気安く撫でんじゃねえよ！」

「悪いな、ついクセでよ。嫌だったか？」

「べ、別に嫌とかじや…」

少女は正直頭を撫でられたのは嫌じやなかつた。剣舞に撫でられるのは何故か落ち着いたからだ。

「おい、店員。さつさとそのいぢやついてる一人をリングを渡して店の前から消えさせろ。早くしねえとクビにするぞ。」

「は、はい！君達、ほらリンクだよ。早く店の前から離れてね。僕がクビになるから。」

「あつ、はい。じゃ、行くか。」

「行くつて何処にだよ？」

剣舞が何処に行くかを少女は何となく聞くと、剣舞は笑つて答えた。

「とりあえず、山かな。」

「はあ…？」

「ここは自然豊かな山…そこに剣舞と少女が来ていた。

「何でついてきたんのお前？」

「アタシの勝手だろ…あとアタシはお前じゃなくて佐倉杏子だ。」

「じゃ、杏子だな。俺は刀刃剣舞。剣舞って呼び捨てでいいぜ。」

「…じゃ、剣舞。ひとつ聞くけど何で山に来たんだ？」

「キノコが食いたかったから。」

「はつ？」

剣舞の言葉に杏子は思わず啞然となる。

確かにキノコ食いたいから何て理由で山に来るやつはそういういから仕方無いだろ？

「じゃ、早速キノコ狩りと行きますか。」

剣舞はそう言いつと杏子もビックリのスピードで山奥へと走つて行った。

「アイツ本当に人間か？…アタシが言えた義理じゃないか。」

杏子はボソリとそう呟いた。

剣舞がキノコを探しに行つてから五分後…

「杏子、沢山キノコが採れたぜ。一緒に食おう。」

腕に大量のキノコを抱えた剣舞が杏子の所に帰つて来てそう言った。

「アンタ、短い時間でよくそんなに集めたな！？」

「そつか？これでも時間がかかつちまつた方なんだけどな？」

杏子は剣舞のその言葉を聞くと頬をピクピクさせながらマイシの時間の基準は何なんだよと考えた。

「さて、焼くか。」

剣舞はそう言つと適当に石で囲いを作り、その中に木の枝をくべ、指からピッヒと氣功波を出し火をつけた。

「何だ、今のは！？」

杏子は剣舞が指から出したのが何かが気になつたが剣舞が笑顔で一緒に食おうぜと言つので考えるのを止め。

地面に座り焼いたキノコを食べ始めた。

「俺の方に寄せてるキノコは杏子は食つちゃだめだぞ。」

剣舞がそう言つと杏子は剣舞の方に寄せて焼いてるキノコをパクッと食べた。

「自分で特別美味しいキノコを食おうたつて……そ……う……は？」

杏子は剣舞の方のキノコを食べたとたん痺<sup>しび</sup>れて動けなくなつてしまつた。

「俺の方に寄せてたのは毒キノコだったのに…仕方ねえ、薬草を取つて来るか。」

剣舞はそう言つと薬草を取りに行つた。

そして一分ぐらいすると薬草を持つて戻つて来た。

「いやー、この山に良い薬草があつてよかつたぜ。ほれ杏子この薬草を食え。」

剣舞はそう言つが杏子は体が痺れて口があまり開かなかつた。

「仕方ねえな…医療行為だから我慢してくれよ。」

剣舞はそう言つと薬草を自分の口に入れモゴモゴしたあと、杏子に口移しで薬草を飲ませた。

「…？」

「これですぐに治るはずだ。」

剣舞がそう言つた瞬間、蹴りが剣舞の顔面に飛んできた。

「ぶつ！？」

「何、人の唇奪つてんだこの野郎！あ、アタシのファーストキスだつたんだぞ！」

「いや、あれは医療行為だつて…あつ、そういうや俺もあれが最初のキスだな。」

杏子はそれを聞くとカアーッと顔を赤くする。

「…つて事はアタシ達、互いにファーストキスを…」

「でもあれは医療行為だからノーカンだよな。ほほつ。」

杏子はノーカンと叫び言葉を聞くとペシッと頭にきた。

「アタシのキスはカウントする価値も無いってか？」

「いや、杏子が俺なんかとのキスでカウントするのは嫌だらうなって思つてノーカンって言つたんだけど…何でそんなに怒つてんの？」

杏子はゆっくりと近くにある木の枝を掴むと剣舞に向かつて振り下ろした。

「わっ！？ちよつ、タンマ！俺のリンゴをあげるから落ち着いてくれ！」

「食いもんぐりこで今のアタシの気が落ち着くかあーーー！」

杏子は怒りながら剣舞に向かつが剣舞は走つて逃げる。

「何でそんなに怒つてんだよ！？」

「つむせえーアンタみたいな良い奴ならつてちよつと思つたんだよー！」

「何の事だよ！？」

「私の純情返せええー！」

杏子は怒りをヒートアップさせる。

しかし剣舞は空に浮かび杏子から逃げる。

「えつーーー空に浮かんだーーー！」

「またなー杏子。」

剣舞はそつ言つとこの場所を離れ何処かに飛んで行った。

「またな……か。」

杏子はそつ言つと自分の唇を軽く触った。  
あの感触を思い返すよつて。

「また会つたら、責任とらせてやるぜ。剣舞。」

杏子は頬を赤くしながらそつ笑つた。

## ヒーロー見参ー（前書き）

作者「原作とおつまぜるの難しいな…。」

## ヒーロー見参！

「氣…それは生物の中に流れれるエネルギー。」

剣舞は今それを練り上げ 一点に…刀に集中する。

「氣を極限まで高めた瞬間…刀を鞘から天に向かい一氣に引き抜き…居合いを行づ。」

そして最後に息をふう…とつき、刀を鞘に収めた。

「運動終わりだ！それにしてもこの世界はマトモに修行を出来る環境じゃねえな…まつ、遅れた分は後で取り返しやいいや。」

この世界は自分の世界ほど修行に適した環境が無い為、剣舞は厳しい修行が出来なかつたが、後で遅れた分は取り返せば良いと楽観的であった。

「それにしてもマリは最近、妙に嬉しそうな顔をしてたな。良い事だよな。…でも魔法少女の仲間が出来るとかボソッと言つてたような…まつ、いつか。」

普通は氣になる事をあつたりとまつ、いつかの一言で済ませる剣舞。魔法少女と言う言葉を聞いたら普通は魔法少女？と考えるのだろうが剣舞だから考えなくとも仕方無い。

「でもこの世界、何か時々変な氣配がするよなー。…本氣で一回探つてみるかな。」

剣舞は全身の全神経を研ぎ澄まし集中する。

そして剣舞は変な気配の正確な場所とそこにいる誰かの氣とそれに近づくマニアと誰かの氣を感じた。

「マニアーー何か嫌な予感がするな。気配の場所に向かおう。」

剣舞は気配の場所へと空を飛んで向かつて行く。  
そしてすぐその場所へとついた。

「あそこが変だ…んつ？」

剣舞は明らかに他とは違つ空間を見つけると同時に捕縛術にかかり  
ている、黒い長髪の少女を見つけた。

「お前、何で縛られてんだ?」

「貴方は誰…?」

「誰かって言つと俺は刀刃剣舞だ。それよりも俺、あの変な空間の  
先に進むから。」

剣舞はそう言つと刀で少女を捕縛していたものを切り裂き、先へと  
進んだ。

「えつー?ちよつと待ちなさいー!」

黒い長髪の少女は先に進む剣舞を呼び止めようとするが、その声は  
届かなかつた。

変な空間…もとい結界の中でもマミと魔女が交戦していた。

「お出まじのとこ悪いけど一気に片付けてやるわ…！」

マミは魔女に捕縛術をかけ銃を向ける。

そして勝利を確信した表情をする。

マミと共にいた少女一人もマミが勝利すると信じて疑わない表情をしていた。

だが魔女は動きを封じられていない口から鋭い牙を持つ不気味な自分が魔女の一部を出してマミへと向けた。

「え？」

予想になかった魔女の行動にマミはまだ一言それしか言えなかつた。もしかしたら自分の最後の言葉になるかもしれないのに…。

マミは死を覚悟した。

そして最後に思い出すのは剣舞の姿だった。

（彼に自分のしている事を言って協力してもらえば私、死ななかつたのかな…？でも彼を巻き込む訳にはいかないよね…。好きって言っておけばよかつた…。）

マミは不意に目を閉じる。

人は恐怖から逃れたい時には目を閉じてしまつものだ。

しかし幾ら目を閉じて待つても自分の意識が無くなる様子は無かつ

た。

マリはやつへつと皿を開けるセリフ……

「よつ…マリ、危ない事してるなひ俺に言えよな。俺はいつこう事は慣れっこなんだぜー。」

片手でマリに向かって来ていた魔女の一部を抑え、マリに笑顔を向ける剣舞が居た。

マリは剣舞の姿を見ると田から涙をボロボロと流し始めた。剣舞はそれを見るとオドオドする。

「えつ！？何で急に泣き出すんだ！？どうか悪いのか？」  
「違うの…嬉しくて泣こちやただけ。」

マリは嬉しかった、自分のピンチに剣舞がまた助けに来てくれた事が。

しかも今回もヒーローのようなタイミングで。

「じゃ、ここつをやつせと片付けつかな。」

剣舞は魔女を抑えていた手を魔女的一部から離し、その手で魔女の一部をぶん殴り、ぶつ飛ばす。本体も一部がぶつ飛ばされた勢いで一緒にぶつ飛んだ。

「それじゃお前を…斬るぜ。」

剣舞は居合い抜きの体制に入り、魔女を見据える。そして魔女に勢いを付けて向かい、剣舞は魔女を通りすぎた。

「…………。」

魔女は何事も無いように剣舞の方を振り向き剣舞に食らい付こうとするが。

「もう…終わってるんだぜ。お前は。」

剣舞がそう言いつと魔女に無数の切れ目が入りバラバラになつた。すると魔女が倒された事で結界は消え、さつきまで異様な雰囲気な場所は普通の場所に戻つた。

刀を鞘に收め、剣舞は一息つく。

表情はやつやままでの真剣なものとは違い柔らかい表情をしていた。

「わあ、帰りひや。マミ。」

剣舞は明るい無邪氣の笑顔をしてマミとそう言つた。

剣舞の笑顔を見るママやマミと一緒にいた一人の少女は頬を赤くする。

それほど彼がした笑顔は魅了的だったのだ。

「君は一体、何者だい？」

突然横から白い、見た目的には一応かわいいと言われる生き物が剣舞に話しかけてきた。

剣舞は話しかけてきた生き物の方を向く。

「うわー、変わった動物だな。」

「そんな事より僕は君が一体何者かと聞いているんだ。」

白い生き物は何処かムカつかく感じで剣舞にそう言った。

しかし剣舞は別にイラつかずに白い生き物に対して自分の事を答える。

「俺は刀刃剣舞。」この世界とは別の世界からやつて来た人間だぜ。」

「別の世界の人間だと……！」

白い生き物はその事を聞くと驚く表情をした後、マリの方を向いた。

「マリ、君は彼と知り合ひの用だけど僕には彼の事を一度も言わなかつたね？」

「キュウベえに別に言う事ではないと思つて……。」

「……まあ別にいいや。それにしても……。」

キュウベえは剣舞の方を向き、ある事を考える。

（彼は魔法少女でも無いのにあつさつと魔女を倒した……とりあえず注意はしておくか。）

キュウベえは自分の計画に影響を及ぼさないよつて剣舞に注意を払う事を決めていた。

そして剣舞はキュウベえがそんな事を考えている間にマリをお姫様抱っこして宙に浮いていた。

「えっ！？剣舞、貴方……」

「空飛んで帰る方が早えからな、悪いけど抱えて行くぞ。マリ。」

「剣舞って空飛べ……」

「マリが何か言ことぶる前に元剣舞はマリを抱えて空に飛び立つ。

「まみれ。マリ、もうだらだらから眺める風景は。」

空を飛んでマリの家に向かひ、剣舞はマリの上から見る風景について聞いた。  
すみとマリはいつ答えた。

「うそ、良い眺め…。」

「やつや、よかつた…。」

剣舞達は空を飛び、マリの家へと帰路につこうとした。

剣舞が空に飛び立つ所を影から見ていた黒い長髪の少女は剣舞について考えていた。

(……刀刃剣舞。異世界から来た人間か…奴のおかげでマリは死ななかつたか…魔女をあつさつと倒すあの力はもしかした…。)

剣舞は己の知らないまま色々な思惑に巻き込まれつづあるのだった…。

## ヒーロー見参ー（後書き）

作者「指摘やアドバイスをよかつたらどうかくださいー！」

モテるべせにモテないとか言つ男はムカつかれる（前書き）

作者「剣舞の鈍感さが表れます。」

モテるぐせにモテないとか言つ男はムカつかれる

剣舞は現在、困惑していた。  
その訳は…

「異世界から来た人って本当ですか！？」

「空を飛べたりしたけどヒーローか何ですか！？」

「異世界から来たのは本当に俺はヒーロー何かじやねえよ。…  
はあ質問されるのって疲れんな。」

マミが連れてきた一人の少女。鹿田まどかと美樹さやかに質問攻めにされていたからだ。

「…なあ、マミ。何で二人を連れてきたんだ？」

「剣舞の事が知りたいて二人が言つたからだけど？」

「俺の事なんか知つて楽しいのか？」

剣舞は正直自分の事なんか知つても楽しくないと思つてゐるが実際異世界から来た人などと聞けば知りたくなるものである。

「あとマミさんとはどんな関係で？」

さやかは剣舞の肩を肘で軽くつきながらやうつ聞く。  
剣舞はさやかの問いに普通に答えた。

「居候で友だちだ！」

「……何だ恋人であんな事やこんな事をしてゐ中じゃないのか…。  
「美樹さん…？」

さやかは剣舞の答えにガツカツし。マリヤがの言つた言葉に顔を赤くする。

「あの…剣舞さんの世界ってどんな世界ですか？」

まどかがそう質問すると剣舞は少しだけ考へたあと答えた。

「凄え賑やかな世界かな？」

「できればもっと詳しく教えてほしいんですけど…。」

剣舞の余りにも短く単純すぎる答へ、まどかはもつと詳しく教えてほしいと剣舞に言つた。

まどかにそう言わると剣舞は必死に自分の世界の特徴を分かりやすく頭の中でまとめあげようとする。

そして自分なりにまとめあげた事をまどかに答へる。

「まず、宇宙人が凄えいるぜ。あとは強い奴が沢山だ。」「宇宙人がいっぱいいるんですか！？凄いです！あと強いつてどのくらいですか？」

まどかは剣舞の世界に宇宙人が沢山いる事に驚いたあと、剣舞が言った強い奴の強さはどれくらいかを聞いた。

剣舞はそれを聞かれると説明しづらそうな表情をした。

「どのぐらいこつて言われるとな……めちゃくちゃ強えかな。」

「めちゃくちゃこつて言われても分かりにくいんですけど…。」

まどかはめちゃくちゃでびびり強いか規模を理解できなかつた。

確かに「めちゃくちゃ」と叫ぶ言葉では強ければマイナチ伝わつてしまつた。

いだらう。

剣舞は少し考えたあと、まどかに一応分かりすいと思つた表現で強  
その感覚を伝える。

「特殊な惑星以外の惑星は軽く消し飛ばせて、大体の次元の銀河も  
一瞬でチリにできるかな。」

まどかはそれを聞くと、驚愕した。

惑星とか銀河とか、もつ完全に次元の違う話だったからだ。

「ええ！へじや あ剣舞さんもそんな事が出来るんですか！？  
「やれば出来るナジマムカ。惑星とか銀河とか破壊しても意味  
ねえだろ。」

剣舞はまどかにさつ言葉を返した。

確かに惑星や銀河を破壊するとかそれが目的でないなら意味は無い。

「剣舞つてそんなに凄かつたんだ……。」

「マリさん。剣舞さんに魔女退治がおひてもうつたら樂になります  
ねー。」

マリが剣舞の凄さに静かに驚いてみると横からさかがそつ立つ  
あた。

確かに惑星と銀河がゼリとか言つてこるレベルの者に魔女退治を手  
伝つてもいえば楽だらう。

「でも、剣舞を巻き込むのはせはまつ氣が引けるかなって……。」

マリがやつ立つと剣舞は笑顔でマリに対していひ立つた。

「気付くんですねーマリ。俺は、ああいうのマジで慣れてんだ。それまでの時はマリ、ヤバかったじゃねえか。だから俺に頼れよ。なつ」

「…」

マリは剣舞にそう言わると笑顔になった。  
自分が頼つていい人がいるんだと感じて。

「マリさん。顔が赤くなつてない? あつ、もしかしてマリさん。剣舞さんの事が好きな…。」

セセカがそうおつすとマリは魔法少女の姿に変身し銃をセセカに向ける。

「美樹さん? そこから先はティロ・フィナーレよ?」

「いやー? [冗談ですよねー?]

セセカはいつもマリに叫びながら、マリの皿は笑つてなかつた。  
セセカは不味さを感じると日本人の代表的謝罪方法。DOGEZAの体制に入る。

「済みませんでしたあー! 先は言こませんからじつがい勘弁をー。」「分かればいいのよ。」

マリはいつも姿と変身を解き元の姿へと戻る。  
マリが元の姿に戻るのを見て、セセカが本当に射たれるのではー? と見ていたまどかはホッとしていた。

「マリは[冗談がキツいよなー、まほつー」

剣舞はマリのやつらの行動が冗談だと思っていたが、セセカは…

(剣舞さん。さつものマリさんの田は「冗談言つてる人の田じやなかつたです…。」)

マリの行動が「冗談とは思つていなかつたのであつた。

とつあえず、まどかは氣を取り直して剣舞に質問する。

「剣舞さんの世界の人で剣舞さんの知り合いつてどんな人ですか？」

まどかにそう聞かれると剣舞は今までと違ひ答えやすそうな顔をした。

「そうだなー、サボテンステーキの店をやつてる、緑色の声が妙に迫力があつて、青色の沢山の子供がいる人や白い体に紫色の部分もある、ツルツルの人とか、たこ焼き屋をやつてる、ハゲ頭のイカツイけど良いおっちゃんとか、他にもまだまだ居んなー。」

剣舞は楽しそうに自分の知り合いの事を語り出す。

まどか達は剣舞の知り合いの話を聞いていて…

(（（変わつてる人達ばかりだなあ…でも一度見てみたいかも。））

と思っていた。

剣舞が知り合いの事を一通り話すとまどかはある質問をする。

「剣舞さんつて恋人いるんですか？」

まどかのした質問は女の子の好きそうな話題だった。剣舞は恋人が居るかと聞かれたとあつたりと答える。

「居ねえけど?」

剣舞がそつあつさり答えるとマリはホッとして、まどかとヒカは意外そうな顔をした。

「剣舞さん、モテないんですか! ? 見た目はカッコイイし性格も良いのに! ?」

「何言つてんだよー、まどか。俺は別に見た目もそんなに良くなーし、性格もそんなに良い方じやないと思ひづぜー。」

剣舞のその発言に少女三人は思った。

剣舞はモテてるのにそれに気付いて無いだけの人だと。こんな鈍感な男を好きになつた女の子は可哀想である。と言つつかこの場に一人居たが。

「まつ、俺は別にモテなくとも良いから気にしてねーけどなーははつー。」

剣舞のこの発言は剣舞を好きになつた女の子からしてみれば、気にしうとグーでいきたい発言である。

「剣舞。一回殴つて良い?」

「こきなり何だよーー・マリ・ー・。」

マリがいきなりそんな事を言つものだから、剣舞はビックリする。でもマリの殴りたくなる気持ちは仕方ないだろう。

「俺、何か時々仲間達の多半からそんな事を言われるんだけど、理

由は一体何なんだ！？」

それはきっと仲間達がテメエは鈍すぎるからいつへござやあーー。と言ふ気持ちになつてゐるからだと思つ。

「特に女子の目付きがその時、怖くなつてんだよな……。」

そりや そつだれつ。女子は恋愛事に敏感だから仕方ない。

「アリス。落着いたー。」

「おかうたつ。」と、  
「気持ちは向となく分かります」と！

。ヘミングウェイ著『死の瞬間』

しかし

「俺は正直恋愛とかあんまり分からぬから、一生しなくてもいいやーははっ！」

その言葉を言つた瞬間トリプルパンチが飛んできた。

三人は声を揃えてこう言った。

「「「鈍すぎの上に恋愛しなくてもいいとか恋する乙女の望みを潰すな——！——！」」「

マミは冷めた目で剣舞を見ると「うつた。

「剣舞。今日は外で寝てね？」

「ええつ！？」

剣舞は何故そんな事を言われたかは分からないが、有無を言わさず  
に家の外に追い出された。

「鈍感すぎるのって問題ですよね。あの人の事を好きになつた人が  
可哀想です。」

「あれは私達もさすがにイライラとしましたよ。マリマリさん。」

「……バカ剣舞。」

まどかとさやかは鈍感すぎ剣舞にイライラとして、マリマリボソリと呟いた。

そして外に追いつかれた剣舞は…

「何で三人ともあんなに怒つてんのか分かんねえや？」

いまだに自分の事を理解せずにいた。

「どうしようもない鈍感な剣舞であつた…。

この先、こいつに恋する乙女は報われるのかは分からない…。

## 口てるべせにモテないとか言つ男はムカつかれる（後書き）

作者「今日は鈍感な剣舞さんに質問です！貴方が近くによると顔を赤くする女性はいましたか？」

剣舞「そういうや、俺が近づくと急に風邪を引く女性って居んな。俺、何か悪い菌でも持つてんのか？」

作者「持つてるっちゃ持つてますね…。あと貴方が近づくと顔を赤くする人は風邪じゃないです。」

剣舞「じゃ、もっと悪い病気何か！？俺、あんま女性に近づかないよつにしねえど。」

作者「いや、命に別状は無い事なんで。」

剣舞「じゃ、何なんだ？」

作者「…………やっけやつてくれださい。」

クンッ！

剣舞「うおー！？急に地面から爆発がー！？」

作者「避けたか…まつ、仕方ありませんわ。」

剣舞「……てか、今の技はたこ焼き屋のおつかやんのじゃ？」

作者「読者の皆様、次回もよろしくお願ひしますー。」

剣舞「あれっ！？無視！？」

## 焰との対話（前書き）

？？？？「後書きは俺様が出るぜー！」

## 焰との対話

現在、剣舞はマリに家から追い出され、トボトボと歩いていた。

「マリは何であんなに怒ったんだろうな…さつぱり分かんねえや？」

自分の追い出された理由を考える剣舞だが、中々答えは見つからない様だった。

答えは非情にシンプルなのだが…。

剣舞が考えながら歩いていると何かを突然感じた。

「んっ？これはマリを助けた時に倒した、魔女つて奴にちょっと似てる気配だ。あと、そのすぐ近くに複数の氣を感じる。…行ってみつか。」

剣舞は感じた気配が気になつたので気配を感じる場所へ向かった。

そして気配の発信源へとたどり着く剣舞。

剣舞のついたその場所は小さな町工場だった。

その町工場は閉まっているのに中から複数人々の氣を感じたので剣舞は入り口を力強く開け、中に入る。

「ここつひの里…正気じゃねえぞー！」

剣舞は人々の目が正気では無い事にすぐに気づいた。

そして人々の中の一人の女性が手に何かを持って、椅子に座つてゐる男性の前の洗剤の入つてゐるバケツへと近づく。

「あれは塩素系の洗剤… つて事はもしかして…？」

剣舞は女性の手に持つている物で事を理解するとバケツを掴んで外へと放り投げた。

「危ねえ〜、あとちょっとでこの人たちがお陀仏だったぞ。」

剣舞がこれでひと安心と思っていると複数の人々が剣舞を睨みながら近づいて来た。

「魔女つて奴を倒さねえといいつらは元に戻らねえみたいだな。… 済まねえ。」

剣舞は一言謝るビーリビリと威圧を出し人々を氣絶させた。

「ちよつと手荒だけど、これで魔女を落ち着いて探せんな。」

剣舞がそつと手荒だけ、これで魔女を落ち着いて探せんな。  
魔女の結界が張られた様だ。

「どうかに魔女が居んだな。さて、探すか！」

剣舞は魔女の気配がより色濃い場所へ向かい、魔女と対峙した。

「人形みたいな魔女だな。さて、すぐに終わらせつか！」

剣舞は刀を急に追い出されて持つて居なかつたので素手で魔女を打ちのめそうとする。

「戦哮獅子碎波！」

拳から出した獅子のオーラによる衝撃波で剣舞は魔女を軽く倒した。

「おっ？何だこれ？」

剣舞は魔女を倒すと出てきた物を拾う。

剣舞が拾った物は魔女の卵“グリーフシード”だ。

当然、剣舞はこれの事をよく知らない。

「そういうや、あの時の奴もこんなな落としてた様な。まつ、深く考  
えなくともいいか！」

剣舞は特に深く考える事もなく、とりあえずグリーフシードは持つ  
て置く事にした。

剣舞が魔女を倒し、工場から出るとあの時の黒い長髪の少女が居た。

「魔女の気配が消えたけど…貴方が魔女を倒したの？」

「うん、そうだぜ。」

「そう…少し貴方に話があるのだけど。」

「話つて？」

剣舞が何の話かを聞くと、黒い長髪の少女は語り始める。

「まず、私の名を言つておくわ。私の名は暁美焰。焰でいいわ。刀  
刃剣舞。」

「何で俺の名前を？」

「陰で聞いていたからよ。」

「ふーん、そつか。それよりも焰。俺は剣舞って呼び捨てでいいぜ

！」

「では、剣舞。貴方にある事を話すわ。そり.. ワルブルギスの夜について。」

焰は剣舞にワルブルギスの夜の事について全てを話す。  
強力な魔女でこの街にしばらく口がたつた後にやつて来る事を。そしてその魔女がどれだけの被害をもたらすかも。

「だから、この街を守るために貴方の強力な力を貸してほしい  
嘘はいけねえぜ？」

焰は剣舞にそう言われた瞬間、表情を強ばらせる。

「私は嘘はついて」

「ワルブルギスの夜つてのがこの街に来て大きな被害をもたらすつてのは俺は本當だと思ってる。」

「じゃあ、私がついた嘘と言つるのは？」

焰がそう言つと剣舞は頭を軽く搔きながら答えた。

「焰.. お前は街を守りたいんじゃなくて、たつた一人の大切な人を守りたいんじゃないかな？」

焰は剣舞にそう言わるとドキッとした。正にその通りだから。

「大切な人を守りたいから力を貸してほしい。素直にそう言えぱいいじやねえか。」

「..... 貴方は街よりもたつた一人を守りたいと思つ私を軽蔑しないの？」

焰がそう聞くと剣舞は一ツと笑い、焰に答えた。

「何で軽蔑しなきやいけないんだよ？いいじゃねえか、街よりも大切な一人を守りたいって思つても。」

「貴方、変わつてゐるわね。普通は街を守る方が一人を守るより大切なんじやない？」

「そつかあ？街なんて人を守るついでに守るもんじやねえか？」

剣舞が陽気な感じにそつとうと焰は思わずクスッと笑う。

「それじゃあ、貴方は人を守るためなら街はどうなつてもいいの？」

焰は少し意地悪な感じに剣舞にそう聞いた。  
だが剣舞は困惑する事もなく答えた。

「だつて、街は作り直せばいいじゃねえか？大切なのは命だろ。」

「…………確かにそうね。それで貴方は――」

「手伝うぜ。ワルブルギスの夜つてのを倒すのを。」

「そう……それは良かつた。」

剣舞が協力してくれると言つと焰はホッとした。  
これであの子を守れると……。

「焰。それにしてもお前、凄えな。」

「えつ？何が？」

焰は急に自分が凄いと言つて混乱するが、剣舞はそんな焰に気づく事なく言葉を続ける。

「焰。お前はさ、色々なもんを一人で抱えてきたんだな……本当に凄

えよ。…よく頑張ったよな。だけどもう一人で頑張らなくていいぜ？これからは俺も友だちとして一緒に抱えてるもんを持ってやるから。」「………。」

焰は剣舞にそう言われた瞬間、目から涙がポロポロと流れてきた。自分は確かに一人で色々なものを抱えて来た。それに彼は気づき一緒に抱えてくれるとまで言つてくれたから。

「何で泣くんだ！？」

「貴方は不思議な人ね…本当に一緒に抱えてくれるの？」  
「もちろん！」

剣舞が力強くそう言うと焰は自然と柔らかい笑顔をしていた。長らくしていなかつた笑顔を…。

「焰、お前…」  
「何かしら？」  
「凄え笑顔が似合つたな！」

剣舞は思つた事を言つただけだろうが、焰はその言葉に顔を赤くした。

「なつ！？」  
「笑わない時でも、焰はかわいいけど、笑つた時は笑わない時の数倍かわいいな！ははっ！」  
「ナンパのつもり…？」  
「ナンパ？何だそれ？俺ただ思つた事を言つただけだぞ？」  
「貴方、他の女子にもこんな感じなの？」

「思つた事は普通に言つてんかな？時々相手が顔を真っ赤にして怒つて殴つてくるけど。」

「それ怒つてるとかじやないと思つわ…。」

この男はある意味やつかいねと思う焰だが、剣舞はそんな気持ちを知るよしもない。

「じゃあ、焰！またな！」

剣舞はそう言つとこの場を空を飛んで離れていった。

「あつ！…行つちやつたわね。剣舞…一緒に居て不思議と落ち着く人だつたわ…。」

剣舞が飛んで行くのを見ると焰も帰路へとつべのだった。

剣舞に対する不思議な気持ちを抱きながら…。

## 焰との対話（後書き）

作者「????さん。剣舞はやっかいな菌をばらまきますね。」「まつたくだぜ。てか俺はまだ召前伏せんのかよ？」

作者「まあ、辛抱してくださいよ。」

「？」「仕方ねえなあ。しかし、剣舞の奴は菌をばらまいてんの母親にバレたらボコられるな。」

作者「そうですね。あのママさんは怒るでしょ。」「？」

「父親が丸くおさめるんだろ？」「？」

作者「ではそろそろ。」

「？」「読者の奴等ー。」の小説と俺のたこ焼き屋をよろしく頼むぜ！」

作者「読者の皆様」の小説をよろしくお願いしますー。」

人のために願う事は悪い事じゃない（前書き）

ナ？？「魔法少女まどか マギカ ワールドオブメシア 始まるぜ！  
！てか俺様、名前が最初の部分だけ出てんな。」

人のために願う事は悪い事じゃない

焰と別れた後の剣舞は現在、寝床を探している時に教会を見つけていた。

「教会じゃねえか！」りや野宿じゃなくとも済むかな？ととりあえず中に入つて神父さんに泊めてくれるか頼んでみよう。」

剣舞は教会の中に入つた。しかし中には神父さんは居なかつた。

「誰もいねえな。…勝手に寝たら怒られるかな？」

剣舞がそんな事を言つていると剣舞の後ろに誰かが來た。

「誰だ！テメエ！」

剣舞の後ろに居た人物は剣舞を怪しい奴だと想い怒鳴り付けた。剣舞は怒鳴られると後ろにバッと振り向いた。

「俺は怪しい者とかじゃなくて…って、杏子…？」

剣舞の後ろに居たのは人物は杏子だった。

杏子は剣舞が振り向いた瞬間、驚いた顔をした。

「剣舞！？何でアンタがここにー？」「訳がありまして…。」

剣舞はこうなつた経緯を杏子に話した。杏子は剣舞の話を聞くと笑い出す。

「あはははははー！そりや、アンタが悪いわー！」

「やうなのか？」

剣舞は自分が悪いと呟つ事をまだ自覚できない鈍感だから。

「それにしても、剣舞がマリの知り合いで、マリの所に話をしなってるのはね。」

「マリの事を知ってるのか？杏子。」

「まあ、一応ね。それよりも剣舞、マリと一緒に住んでいて何かをやつたりしたのかい？」

「何かつて…何？」

剣舞がやつと言つと杏子はさっしにかる。

「！」という時の何かつて言つたら…あれだよ。」

「あれって？」

「あれはだな…女の子の口から言わせんなー！」

杏子は剣舞を逆ギレしてぶん殴つた。

まあ、剣舞にも悪い所はあるが…。

「ぶつ！？何でいきなり！？」

「そんな事より剣舞。アンタ、泊まる所がないならこの教会に泊まるといい。この前の借りもあるし。」

「本当か…サンキューなー杏子ー！」

「礼を言われるほどひの事じやねーよ…。」

杏子は剣舞に礼を言わると顔を少し赤くした。

「あれ？でもこの教会、杏子が泊まつていいつて言つなら、杏子の教会なんか？」

剣舞はちょっとした疑問を言つと。

杏子は顔を暗くしながら答えた。

「アタシのつて言つより、アタシの親父のだよ……。」

「つらい事を思い出させちまつたのか？悪い……。」

剣舞は杏子の顔を見るにつらい事を思い出せたと思つて謝るが、笑つて剣舞にこう答えた。

「別に剣舞のせいじやねーよ。どっちかと言つと私のせいだ……。」「私のせい？」

杏子が私のせいと言うと剣舞はその事が気になつた。

杏子は剣舞が相手だから話してしまうのか、語りだした。

「なあ、剣舞。今から話すのは一人のとある少女の話だ。…とある一人の少女は正直すぎて優しすぎる父親が大好きだつた。その父親はどうして世の中が良くならないか真剣に悩んでる人だつた。そしてその父親は世の中を良くするために人々にいっぱい自分なりに考えた事を話した。だけど誰も父親の事を分かつてくれなかつんだ…。だから少女はとある願いを叶えてくれる人物に“みんなが父親の話を真面目に聞いてくれますように”つて頼んだんだ。そしてみんな、父親の話を聞いてくれるようになつた。そのあと少女は願いを叶えた代償に悪い奴らと戦う宿命を義務づけられた。少女は悪い奴らと戦う事自体は苦しくはなかつた。だって裏から世界を救つてると思つてたから。でもね、ある時カラクリがばれた。父親の話を聞いてくれるようになつたのは魔法の力だつて事が父親に知られてしまつ

たんだ。父親は少女を魔女と罵った。そのあと父親は壊れてしまい、少女一人を残して一家心中した。どう思う剣舞…？」

「どう思つて？」

「少女の事… 少女が願わなければ父親は壊れなかつた。家族は死なかつた。この少女の事をどう思つ…？」

杏子は悲しげな目をして剣舞にそう問いかけた。

すると剣舞は目を静かに閉じて少し考えた後、こう答えた。

「少女は悪くねえと思う。」

「どうしてだ？ 少女が願わなければ家族は死ななかつたんだぞ！」

杏子が悲痛な顔をしてそう言つと剣舞は迷いなくこう答えた。

「少女は悪くねえよ。だつて父親のために願つただけだろ。それで家族が死んじまつたのは確かに悲しいよ… でもその少女が悪くない事だけは分かるぜ。」

「本当に悪くないと思つのか…？」

杏子は涙を流しながら剣舞にそう聞いた。

剣舞は杏子が泣き出した事に驚きながらも答える。

「ああ、本当に悪くないと思つてる。もしその少女を悪いとか言つ奴が居たら俺がぶつとばす！」

剣舞がそう言つと杏子は思わず笑つていた… 剣舞のお人好しの良さに。

「剣舞… アンタって本当に良い奴だな。」

「そうがあ？ 僕は思つた通りの事を言つて、思つた通りの行動をし

てるだけだぜ？」

「… 剣舞はただ自分に正直に生きているだけだ。ただそれが人に  
とつては良い人になつていいだけなのだ。

「…… 剑舞、実は今の話の少女はあたしなんだ。」「  
えつ？ そつなのか？」

杏子が言つた真実に剣舞は軽く驚いた。

「あたしの事を悪いって言つた奴が居たら本当にぶつとばしてくれ  
のか？」

「ああ、当然だぜ！」

剣舞がはつきりとそつと笑つた。

「それよりも杏子。つらこい事を話させてごめんな。」

「別にいいよ… 剣舞に話したらなんか色々と楽になつたから。」

「そつか… それならよかつたぜ！」

剣舞は自分に杏子が話す事で樂になつたと聞くと嬉しそうな顔をし  
た。

友だちの役に立てて嬉しいのだろう。

「ふあ… 何か眠くなつてきた…。」

剣舞は眠気に襲われると地面に寝転がつた。

「杏子… 一泊させてもらひつせ…。」

剣舞はそつと田を開じてグッスリと睡眠に入った。

「寝るの早いな…あたしも寝るか…。」

杏子は剣舞の横に寄り添つてぎゅっと剣舞に抱きつき眠りこついた。

今日の事で杏子は剣舞をより意識する様になつただろう。

剣舞の横で寝る杏子はとても安らかな笑顔をしていた。

## 人のために願う事は悪い事じゃない（後書き）

ナ？？「作者！中途半端に俺の名前を出すなよ。」

作者「何となく出したくて…。」

ナ？？「何となくとか言う言葉を聞くとあの超絶な姫を思い出すぜ…。」

作者「でも、あの人は他の次元に行つたから、ナ？？さん。もう会う機会はないかもですよ？」

ナ？？「そりゃあどうかな…てかよ、後書きを男、一人で語るのって何か悲しくねえか？」

作者「次からは剣舞と女の子に任せると…。」

ナ？？「そうしろよ。でも、パキューんとかズキューんな展開にすんなよ。」

作者「しませんよ…。読者の皆様！次回からは後書きは剣舞ヒロイン達がつとめますのでよろしくお願ひします！」

ナ？？「パキューんとかズキューんな展開にはならないからそこは期待しないでくれよ。もしかしたらパキューんとかズキューんに近い事はなるかもしねないけどな。」

## 異変（前書き）

ナツ？「終盤じゃねえのに俺、出てんじゃねえか。」

作者「終盤に出るかもと書つただけで終盤こじか玉をなすこと書つてないので。」

ナツ？「わつこう言ひ回しありなのか？」

作者「あつ……だと思つ……。」

ナツ？「…………」

現在、剣舞は教会に泊まらせてくれたお礼に魔女退治を手伝つていた。

「礼なんていいのによ…。」

「そう言つなつて、俺がしたいつて言つたからやつてるだけ何だし  
れ。」

杏子は剣舞は本当にお人好しだなと思ったがそれが剣舞の良い所か  
とも思った。

「おっ？ あそこ空間の感じが変わつてる。」

「結界か… でも不安定だ。これは魔女じやなくて使い魔か。」

「魔女じやなくとも人に危害を加えるのは間違いねえだろ？ 早速倒  
そうぜ。」

「そうだな。」

前までの杏子なら使い魔に人を数人食わせてからグリーフシードを  
孕ませてから狩ると言つ筈だが剣舞と関わつた事で杏子は少し変わ  
つたようだ。

「何かショボイのが居たな。」

「使い魔だからショボイのは当たり前さ。これぐらいちよちよいと  
終わらせるー！」

杏子は使い魔を槍で軽く倒した。

「俺の出る幕は無かつたなあ…。」

「あたしは強いからね。」

杏子がそう言つて剣舞に向かつてピースをしていると杏子の後ろに倒した筈の使い魔が現れた。

「危ねえ！杏子！」

「えつ？」

剣舞は即座に倒した筈の使い魔を蹴り飛ばした。使い魔は勢いよく飛んでいく。

「あれって、あたしが倒した使い魔じゃ……。」

「使い魔とも魔女とも違う感じだ…… アイツ。」

「それってビリーハウス？」

杏子が剣舞にそれがどう言う事か聞こうとした時、使い魔だつた者が大悪魔の様な姿になり剣舞に超スピード襲いかかった。

「剣舞……」

杏子は大悪魔が剣舞に襲いかかつた事で不安な気持ちになるが……  
「大丈夫だぜ？ これぐらいな。」

剣舞は大悪魔の頭を掴み平然と立っていた。

「力の感じがやつぱり異質だな…… そんな事よりぶつとばすか！」

剣舞は拳に気を軽く溜めると大悪魔を殴りとばした。

「グオオオオ……」

大悪魔は叫びを上げると弾けとんだ。すると倒された大悪魔はグリーフシード…の様な物を落とした。

「あれはグリーフシード?」

「グリーフシードって言つのかあれ?」

「魔女の卵だよ。」

「魔女の卵…ねえ。」

剣舞は前に魔女を倒した時に落とした物とは、あれは別物だと思つた。感じる力が違うから…。

「とりあえず回収しないとな。」

「待つてくれ!杏子。」

剣舞はグリーフシードの様な物を回収しようと杏子を呼び止める前に拾つたグリーフシードを取り出し杏子に渡した。

「剣舞、グリーフシードを持つてたのか!?」

「前にちょっとな…。なあ、杏子。それやるからあのグリーフシードを拾うのは止めた方がいい。」

「何で?」

「あのグリーフシードは何か変な感じがするからだ…。」

剣舞が真剣な顔をしてそう言ひと杏子は拾わないと頷くしかなかつた。

「あれはとりあえず俺が持つとくよ。」

「変な感じがして危ないんじゃねーのか…?」

杏子は剣舞が危険かもしれない物を持つと聞くと心配した。

「大丈夫！俺はこういう事は慣れっこだからな！」

しかし剣舞が笑顔でそう言うと杏子は落ち着いた。

剣舞なら本当に大丈夫そつだから。

（これが何なのか調べてえんだけどな… チャタインが居れば…。）

剣舞はこれが何なのかチャタインに調べてもらいたかつたがチャタインは自分の世界に居るので悩んでいた。

（まつ、どうにかなつか。）

しかしどうにかなるかとあっさり片付けてしまった。

「なあ…剣舞。マミから家追い出されてんだよな。」

「そういうやうだった（一日たつたし許してくれてるよな？）」

「よかつたら、あたしと一緒にこれからは教会に住まないか？」

杏子は顔を赤らめながら剣舞に言ひ。

「いや、悪いな。マミが心配してるだろ？から帰らないと。」

だが剣舞にそう言つて断られた。すると杏子は不機嫌な顔をした。

「あたしよりマミが大事なのよ…。」

「いや、そう言つ事じゃ…。」

「剣舞が一緒に住んでくれないならまた悪い事しながら楽に生きる

かな。正直、木の実とかの生活はきつこし。」

杏子は剣舞に万引きを注意されて以来は盜みなどは働くかず暮らしていた様だが剣舞が一緒に住まないならまた悪い事をするかと脅し気味に剣舞に言った。

「悪い事はしちゃ黙口だろ。」

「じゃあ一緒に済めよ。」

「でも、マリが心配してるしな…。」

「やっぱ、マリの方が大事なんだ…。」

「杏子もマリと同じじぐらい大切な友だちだ!」

剣舞は堂々とそう言った。杏子は友だちか…と少し暗い顔をした。友だちよつ上になりたいのだろう。

剣舞はどうすればいいんだと真剣に悩みまくっていた。

剣舞が人生で頭を一番使ったのは今日が恐らく初めてだろう。あまりにも悩む剣舞を見ていたら杏子は助け舟を出した。

「じゃあこいつしたらどうだ?」

「へ?」

マリは現在、めちゃくちゃ暗くなっていた。  
その理由は剣舞が外に居なかつたからである。

「一日前で寝なさいとは言つたけど…何処かに行きなさいとは言つてないのに…はあ……。」

マリが溜め息をつくとインター ホンが鳴った。

「剣舞が帰つて来たのね！」

マリは玄関に急ぎ足で向かった。

そして玄関を開けるとマリは喜んだ顔になつたがすぐにそれは崩れ

た。

「杏子…何で貴女も居るの？」

「これから、あたしもここに住むから。」

杏子がそつとマリは喜んでからんとなつた後、剣舞に詰め寄つた。

「剣舞…これは一体何の事…？」

「いや、杏子が俺と一緒に居ねえと連絡事をするつづかうや…。

「本当は一人きりが良かつたんだけど、あたしが妥協してマリの所で三人でもこいつて言つたのさ。」

マリはガクッと床に膝をついた。

「マリ、どうか悪いのか…？」

「剣舞と一緒に生活的な生活が…。」

マリの落ち込みを見てある事に気がついた杏子はマリの耳元でひつ

つた。

「剣舞は渡さないよ。」

「…杏子、貴女も…？」

マリエ杏子の言葉で杏子も剣舞に好意を寄せている事を知ると杏子を睨み付ける。

そんな一人を見ていて剣舞は…

「二人とも仲が良いなー。」

などとのんきに咳いていた。自分の激しい取り合ひが行われてるとも知らずに…。

その頃…剣舞の世界では…

「チャタイン。何で俺に頼むんだ?」

「いや、他の人達が忙しくて出払つててね。」

「それなら仕方ねえか。チャタイン。たこ焼き屋の屋台」とひちやんと転送できるんだろうな?」

「それはもちろん…というか屋台、本当に持つて行くのかい?」

「俺の魂だからな!」

「別にいいけどさ…ちゃんと剣舞を迎いに行ってくれよ?」

「分かってるって。」

おっさんはそつぱつと『708のたこ焼き屋さん』と書かれた屋台を持つて転送装置に乗り、剣舞のいる世界へと向かうのだった。

「のおっさんは一体何者なのだろうか…？」

## 異変（後書き）

剣舞「今回の後書きは俺とマミと杏子が任されたぜ！」

「マミ、何を話せばいいのかしら？」

杏子「適当に何か言えばいいんじゃねーの？」

「マミ、適当つて…。」

剣舞「質問があるからそれに答えようぜ。」

マミ「質問つて読者から来てたかしら…？」

剣舞「これは俺の世界の人からの質問だけど？」

杏子「そんなんでいいのか？」

剣舞「読者から来ないしいいんじゃねえか？えっとまずは…。ペンネーム『天才科学者』からの質問だ。『君達は剣舞とパキューンな事をしたいと思つたかい？…パキューンつて何？』

杏子「何を聞いてくんんだこいつは…！」

ビヨビヨリ！

剣舞「質問のお手紙を破んなよ…。」

「マミ、剣舞とパキューンつて…。」

マミは天才科学者の質問に顔を真っ赤にする。

剣舞「次はペンネーム『mother』からの質問だ。『剣舞！やつかいな菌をばらまいて不祥事を起こしたらお仕置きだからな…！』。これ質問じやねえ！？てか、母さんじやねえか！」

杏子「まともな質問がねーな。」

「マミ、確かにね…。」

剣舞「次が最後だな。ペンネーム『完璧な人』からの質問だ…！」

杏子「ペンネームがむかつくな。」

「マミ「確かに自分を自分で完璧って言うのわね…。」

剣舞「えーと、『ペンネームの件』だが済まなかつたね。俺がペンネームを考えていると横から仲間に俺のペンネームはこれしかないと書かれてしまつてね。書き直そうとも思つたが仲間が好意で書いてくれたものだし書き直さなかつたんだ。俺が書き直さなかつたばかりに大変不快な気分にさせてしまつただろうから謝罪をするよ。』

杏子「むかつくなとか言つてすみませんでした…。」

マミ「凄く丁寧な人だつたわね…。私も謝るわ。」

剣舞「で、質問は『剣舞。君の回りに居る女性が顔を赤らめていたら気持ちに気付いてあげなきゃ駄目だよ?』…質問じゃないじゃん！」

杏子「でも正しい事は言つてんな。」

マミ「全くね。」

二人は完璧な人の言つた事に同意していた。  
しかし剣舞は…

「顔を赤らめてたらつて…ただの風邪じやねえのか?」

ブチツ

杏子「剣舞…鈍感にも程があるだろうが！」

マミ「ちよつと痛い目に会わないとね?」

剣舞「えつ?二人とも何でそんなに怒つてんの?」

杏子・マミ「一回痛い目に会え!…！」

剣舞「ええーーーーーーー?」

簡単に諦めるな（前書き）

ナツ？「俺様の名前が明らかになるぜえ！」

## 簡単に諦めるな

「マリヤ。剣舞ちゃんにお話しがあるんですけビ。」

「え? ?」

「と言つわけで美樹わんを連れてきたの。」

「何だ、セヤカ? 僕に話しつて?」

剣舞に話しがあると言ひ事でマリヤの家に来たセヤカは剣舞に真剣な顔をしながら話した。

「剣舞さんって不思議な力を使えますよね?」

「まあ、こいつかは使えるぜ。」

「剣舞さんは癒しの力って使えますか?」

「そいつは無理だ。」

剣舞にやうきつぱり言われたセヤカは落ち込んだ。

「無理……ですか…。」

「俺の仲間なら使える奴が居んだけどなー。」

剣舞は申し訳なさそうに言つた。

「剣舞さんはその仲間を連れてくる事はできないんですか?」

「俺は事故でこの世界に来たから連絡手段と次元を移動する手段を持つてないんだよ。悪いけど無理だ。」

さやかはその言葉を聞くと更に落ち込んだ。  
希望を失った人の様に…。

「何でアンタはそんなに癒しの力を必要とするんだ?」

「マリさん。この子は誰?」

「知り合いで魔法少女。佐倉杏子よ。ちよつとわけあって一緒に住んでるの。」

「それよりも何でアンタは癒しの力を必要としてるんだって聞いてるだろ?」

さやかは杏子にそう聞かれると暗い顔をしながら答えた。

「恭介の為だよ…。恭介の腕は今の医学じゃ治らなって言われたから…。」

「何とかしてやりてえけどな…俺は基本戦うしか能がねえからな…。」

「そもそも人頼みにするのが間違いだけね。」

杏子がそう言つてやかは杏子を睨み付けた。

「誰かを頼つて悪いって言つて…」

「誰かを頼るのが悪いんじゃなくて誰かに全てを押し付けるのがいけないって言つてんだよ!」

杏子とさやかが喧嘩になりそつたので剣舞は一人を止めむ。

「二人とも喧嘩すんなって。」

「ちつ、剣舞が言つなら仕方ねーか。」

「ふん!」

一応喧嘩にはならなかつたが二人の仲は険悪な状態になつていた。

「しかしその恭介つてのは医者から治らねえつて言われたらすぐには諦めたんか？」

「だつて医者が言つなら望みはないじゃないですか‥。」

「本当に恭介つてのが手を動かしたいなら医者に言われても無理じゃない。」

さやかは剣舞に突っ掛かつた。

「何でそんな事が言えるんですか！」

「本当に手を動かしたいって奴が誰かに言われたら諦めんのか…ふざけんな‥！」

滅多に怒らない剣舞が激しい怒りを見せた。

「世の中には手を動かせないよりもっと酷い目に会つてる奴も居るんだ！そしてそいつらは医者に言われたら全員が諦めてんのか！違うだろ！医者に言われても諦めずに現状を変えようと必至にもがいてる奴も居んだろ！簡単に諦めるつてのはそいつらに対する侮辱じゃねえか‥！」

剣舞の言つた事は間違つてはいないだろう。

世界には医者にもつ駄目とか言われても必至にもがいてる者は居る。

そして彼らは医者の言つた言葉を覆す事もあるのだから‥。

「済まねえな…こきなり怒鳴つてよ…さやかが悪いわけじゃないのにな‥。」

「いや、こいんです…確かに剣舞さんの言つ通りです。私、恭介に頑張つてみるよつて言つてみます。」

「そつか…じつちも仲間と連絡とれたらビビンかしてくれるように頼んでみつからな。」

「ありがとうござります…。それじゃ…失礼します。」

さやかはマリの家から出てこき恭介の居る病院へと向かって行つた。さやかが出ていった後、剣舞は少し暗い顔をしていた。

「俺、さやかに言い過ぎたかな…？」

「剣舞は正しい事を言つたと思つ。それに剣舞は最終的にビビンかするつて約束したじゃねーか。気にすんなよ。」

「ありがとな…杏子。」

「れつ、礼を言われる事は言つしねーよ。」

杏子は剣舞に礼を言わると頬を赤らめて照れていた。

「美味しいぜー俺のたこ焼きはーーパック200円ータコモトカイー！  
ぜひ買つてくれー！」

外から突然響き渡る声がした。

そしてその声を聞いた瞬間、剣舞は驚いていた。

「「」の声は…！？」

「外でたこ焼き、売つてるみたいだねーマリ、おーれ。」「  
奢らないわよ。庶民なのに図々しいわ。」

杏子はマリの耳元である事を茲ぐ。

「剣舞に“あーん”ができるや。」

「買いましょうかー！たこ焼きー！」

マリはすぐに「口рош」と態度を変え、たこ焼きを買ひ気になった。  
マリ達は家を出てたこ焼きを買いに行く。

たこ焼き屋の屋台は家の外のすぐ近くにあった。

「いい香…。すみません。たこ焼きを三パック、ください。」

「あいよ…お代はその兄ちゃんとの会話ね。」

たこ焼き屋のおっさんはマリ達にたこ焼きを渡すと剣舞を抱まえて  
屋台へとびに飛んで行つた。

「「剣舞…!…?」」

二人は剣舞が連れ去られるのを見て驚くしかなかつた。

剣舞は連れ去られ…山奥に来ていた。

「ナッパのおっさん…強引すぎねえか?」

剣舞を連れ去つたのはサイヤ人のナッパ。

彼は色んな経緯を経て剣舞の世界に住み着いた人物だ。

「俺達の会話を聞かれるのはあまりよくないだろうが。俺達は本来、  
奴らが関わる世界以外は関わるのはよくねえ事なんだぞ?」

「チャタインに聞かされてるから何となく分かつてることさ…別に

いいじやねえか。」

「お前が親父さんと違つのは軽い所だよな…まつたく。それよりも剣舞、帰るぞ。」

「えつ！？そんな急に言われても困るー俺、約束した事があるんだよー。」

剣舞は焰との約束があるのでまだ帰るわけにはいけないそうナッパに言つた。

「ダメだーこの世界は見たところ奴らは関わっちゃいねえんだ。この世界の出来事はこの世界の住人に任せろ。妙に関わると歪みが起きるからな。」

「それは故意に世界に来た時だけだろ！俺は事故で来たんじやねえか！だから関わってもいいだろ！」

「わががま言うな！お前のパワーはハッキリ言つてこの世界には大きすぎるんだよー。」

言い合いは終わらないかと思われたが、剣舞がある物の事を思い出し、ナッパに見せる事で言い合いは終わりを迎える。

「ナッパのおっさん。これ見てくれ。」

「何だこりやあ？…これ本当にこの世界の物か…？…何故だかは分からねえがヤバイ感じがしやがる…。」

剣舞が見せたのはグリーフシードの様なものだ。ナッパはそれを見て思わず冷や汗を流していた。それが放つ異様な雰囲気を感じて…。

「チャタインにそれ調べてもらつてくれねえか？」

「チャタイン…どうするよ？」

ナッパは通信機を取り出しチャタインにこれをどうするかを聞いた。

『もちろん、調べるよ。では、ナッパ。剣舞を残し帰還してくれ。』

「剣舞の奴は連れて帰らなくていいのか？」

『もしもの事もあるかもしないからね。』

「確かに俺もこれを見ていたらこの世界には手に終えねえ事が起きたかもしだねえと思ったからな。ナイス判断だと思つぜ。チャタイン。』

「あつ！チャタイン。ちょっといいか？」

『何かな？剣舞。』

「回復魔法とか使える人を連れてきてもらえねえかな？」

『それは一体どうしてだい？』

剣舞はさやかとの会話の事をチャタインに全て話した。

『……………分かつたよ。』

「それじゃあ！」

『正し……その恭介と言う人物が諦めずにリハビリを二ヶ月頑張ったらね。』

『やつぱりすぐにはダメだよな……。』

『当然さ。努力をせずにただ諦めてる奴なんかに手を差し伸べる価値はないからね。』

『……………。』

『剣舞。分かつてると思つけど、恭介と言う人物に頑張ればどうとかなるとか言うのはNGだよ？』

『（ギクッ）分かつてるよ……。』

『そう……恭介とか言う人物自身に言つるのはね。』

剣舞はそれはつまり、さやかになら言つてもいいと言つ事と理解し

た。

「分かった。恭介には言わねえよ。恭介にはな。」

『分かればいいんだよ。』

「いいのかよ？ チヤタイン。』

『あまり、負の感情をばらまかれるのもあれだしね。』

『確かにそりや、一理あるぜ。…じゃあな、剣舞。菌をあまりばらまくなよ、母ちゃんにしばかれたくなつたらな。』

ナツパはさう言つと転送装置の力で元の世界へと帰つて行つた。

「菌をばらまくつて何の事だ？」

剣舞はナツパに言われた事を理解できずにいた。

ナツパと別れたあと剣舞はさやかの氣を探していた。  
チャタインとの会話の事を伝えるために。

「おっ、見つけた！ オーーー！ さやかー！」

「剣舞さん！？」

空から急に剣舞が來たのでさやかは少しひックリしたがすぐに落ち着いた。

「さやかにいい話があるんだ！」  
「いい話？」

剣舞はチャタインとの会話の事をさやかに話した。

「三ヶ月頑張れば恭介は治るんですね… よかつた。」

「恭介に伝える時は遠回しに伝えてくれ。直接的な形で言つた場合はチャタインが納得しねえからな。」

「はい、分かりました！ 私、恭介の所にもう一回、行つてきますー。」

さやかは嬉しそうな表情をして走りながら恭介の元へと向かった。

病院の恭介が居る部屋にさやかは現在来ていた。  
ある事を伝えるために。

「恭介！ 頑張つてリハビリすれば絶対治るよー。」

「さやか… さつきも言つたけど頑張れば絶対に治るわけじゃないんだ！ 今の医学で無理と言われたんだぞ！ それともさやかは僕が必至にもがく姿を見て楽しみたいのかい！」

「私はそんなんつもりじゃ… 本当に治るんだよー三ヶ月頑張ればー。」

「三ヶ月頑張れば治る？ その保証は何処にあるんだい？」

恭介は苛立ちを秘めた目でさやかを見ながら言葉を発した。

さやかはそんな目で見られて萎縮するも、必至に恭介に訴えかけた。

「理由は言えないけど治るんだよー。」

「何だよそれ… それじゃ、わけが分からぬだろー。」

恭介は苛立ちを自分の自由に動かない腕を叩きつける事で表現した。  
さやかは恭介が腕を叩きつけるのを見ると悲痛の表情をする。

「やめてよー・恭介！」

「「ひぬれこー・奇跡や魔法でもなければ」」の腕は治らないんだ！」

さやかは奇跡や魔法と聞くとある生物を思い出した。そり…キュウベえの事を。

「恭介…あるよ…奇跡も魔法もあるんだよ。」

さやかはキュウベえと契約し願いを叶える事を決めた。恭介の腕を治すと言つ願いを…。

（剣舞さん…好意を踏みにじつていめんなさい…。でも、こんな恭介は見てられないから…。）

「の口、美樹さやかは願いを叶えると同時に呪いをその身に背負つ事になるのだつた…。

簡単に諦めるな（後書き）

作者「恭介エ…」

ナツパ「ナツパスラッシャーにかけてえ… アイツ。」

作者「頑張れよ！イナズマイレブンGOの剣城の兄ちゃんみたいに！」

ナツパ「確かにあつちは弟が頑張つてたら、リハビリを必至にやつてたもんな。」

作者「ちきしょお…恭介が頑張るイメージがないから、それかが…。

ナツパ「剣舞がどうにかすんだろ。」

作者「…………そっすね。」

ナツパ「でもやっぱり、アイツはナツパブレイクラッショハリケーンにかけてえなあ…。」

作者「技変わつてますよ。」

ナツパ「ナツパスラッシャーの上位技だ。」

作者「そう何ですか。…………ではまた次回…………。」

ナツパ「剣舞…ちゃんとどうにかしやがれよ…。」

ナッパ「女の子、二人ともトークかよ。剣舞の奴はマジで母親にボロ  
られんな。」

## 「マリと杏子と遊園地トーク

「ひつ、ひつたくりだ――――」

「へつへつへつ。」

相手から物を奪つてにやけてるひつたくり犯。

すぐににやけ面は崩れるが。外を軽く走っていた剣舞のパンチで。

「よつと。」

「あべし! ?」

「ほり、盗られた荷物だぜ。」

剣舞はひつたくりにあつた人に盗られた荷物を渡す。

するとその人は荷物からいそいそと何かを取り出し剣舞に渡した。

「これ、お礼です。」

「別に礼なんかいらねえよ。礼がほしくてやつたわけじゃねえんだぞ。」

「いや、私にはもう必要がなくなつたものですから……。」

その人ははうはうと少し走りながらこの場を去つた。

「遊園地のチケットか……マリと杏子を誘つつかー。」

「マリー・杏子・遊園地行いづばー。」

「何だよいきなり？」

「遊園地のチケットはどうしたの？」

「それはだな…。」

剣舞は事の経緯を話した。

「人助けのお礼か…剣舞らしい手に入れ方ね。」

「それよりも一人とも行くか？」

「行く！」

こうして剣舞達は遊園地でデートする事になった。  
剣舞はデートなどと思つてないだろうが…。

「まずは何処に行けばいいかな？」

「王道はジエットコースターよね。」

「お化け屋敷もじやないか？」

マミと杏子はそれぞれ遊園地でメインになつてそな所を言つた。  
剣舞は一人の言葉を聞くとこう答えを出した。

「じゃあ、楽しみは後にとつとして他の所から行こひぜ。」

「剣舞がそう言つならそうしましよう。」

「正直、剣舞と一緒になら何処でもいいしな。」

二人は剣舞の意見に賛成する事にした。

剣舞達はとりあえずコーヒーカップに向かつた。

「ぐるぐる回す奴だな。」

「一人乗りか…。」

「杏子…。」

マイヒ杏子はお互に睨み合つて拳を握り締め……じゃんけんした。結果は杏子の勝ちである。

「よつしゃー」

「せんなん…。」

マイはかなり絶望的な顔をしていたが、杏子はそれを無視して剣舞を連れコーヒカップに乗った。

「マイヒは「コーヒカップに乗らねえのかな?」「マイヒの事なんか気にすんなよ。」

結構酷い事を言つ杏子だった。

杏子は「コーヒカップをぐるぐると勢いよく回した。

「どうだー剣舞!」

「全然平氣だぜー!」

杏子はそれを聞くと更に回転を早める。

「ど、どりだあ…。」

「風を感じて気持ちいいな。」

杏子はあまつこも早く回しそぎたために「コーヒカップから降りたあと。

「おええ…。」

おう吐してしまった。マリはそんな杏子の姿を見て若干ほくそ笑んでいた。何か黒い…。

「だ、大丈夫か…杏子…。」

剣舞は杏子の背中を優しく擦る。すると杏子は少し樂になつた表情をした。

「な…何とかな…。」

杏子は剣舞に背中を優しく擦られた事でとりあえず復活を果たした。マリはあまり面白くない顔でそれを見ていた。

「マリ…何だよその顔は?」

「別に貴女が気分が悪くて動けなかつたら剣舞と二人きりとか思つてないわ?」

「思いつきし思つてんだろ?」

杏子はマリに突つかかるつとするが剣舞がそれを止める。

「喧嘩すんなよ、杏子。」

「だつてコイツが…。」

「それに杏子が倒れたら遊んでおけるわけねえだろ。看病しないといけねえんだから。」

杏子は剣舞にそう言わると顔を真っ赤にしてうつむいた。

「…………劍舞、ありがと。」

「何で礼を言つてんだ?」

剣舞は自分の思った通りの事を言つただけなので何故礼を言われたか理解できなかつた。

剣舞達は次にミラー・ハウスに向かつた。鏡が張り巡らされて混乱する奴である。

「どれだけ早く突破できつかな?」

「鏡のせいで混乱して中々先に進めないのよね……。」「感で進めばいいんだよ。」

剣舞達はミラー・ハウスに入った。

中のフロアはやはり正確な道を分かりにくくしていた。

「分かりにくいわね……。」

「ひといづときは鏡に手を当てながら進めばいいのさ。」「

杏子が鏡に手を当てながら進めばいいこと言つてマリは鏡に手を当てながら進む事にした。

「…………鏡だしちょつとだけなら……。」

マリは鏡に映つている剣舞の男の大好きな所をさわってみた。  
女の子でもこうつことをする時はあるのだろうか……。

「……マリ。何で俺のさわってんだ?」

当然マリは顔を真っ赤にする。

「そりか、体調が悪くなることを心配するが、違つてはいけない」とよみがえつた。」

剣舞はセクハラをされたのマニアを心配した。

「あー、ママ。今のはお詫びとちがつたよなー? どんな感じだった。

杏子は剣舞のあれがどんな感じかをマリに聞いた。

「妻へあつまつて。」

「わたくし？」

マミが手で剣舞のあれの大さをジースチャーすると杏子は目を見開いて驚いた。

「まだ、起つてないのにそんなにデカイのか…？」  
「杏子… 女の子が、起つとか言うのはちょっとあれよ…。」  
「ガチでセクハラした奴にあれとか言われたかねーよ。」

マミは杏子にそう言わると何も言い返せなかつた。  
確かにセクハラをしているし。

「アーハウスを早く突破しようぜー」マリ子。

剣舞にそう言わるとマリと杏子は考えを切り替えてミラーハウスを突破する事にした。

「結構早く突破できたなー。次は何処に行こうか?」

「お化け屋敷がいいんじゃないかい!」

「お化けか？」

マリエお化けと聞くと少しびるねーとしたいた。

「じゃあ、お化け屋敷に行こうぜー。」

剣舞達はお化け屋敷に向かつた。

杏子は別に恐怖の色を見世ないがマミはかなり怯えてる。

「マジで、作り物だからそんなへんなつて。

「ひひりまくでんの！ マリの奴。

杏子はマミの怯え方を笑つていたが、すぐに笑えなくなつた。

「ヴァアアアーンンンンンガアアアアドドドドドド。」

変な奇声を上げながらリアルなゾンビの作り物が現れたからである。

マミを笑っていた杏子が真っ先に驚いて剣舞に抱きついた。マミも驚いて剣舞に抱きついた。

「おー、リアルだな。でも本物には及ばないぜ。」

「剣舞は本物に会った事があるんのかよ…！？」

杏子は剣舞が本物のゾンビに会った事があると聞いて驚いた。  
まあ、驚くのは普通だろう。

「そのゾンビは友だちだけだな！」

「剣舞の友だちの枠つて凄い事になつてそうね…。」

ゾンビまで友だちと言つ剣舞の友だちの枠はどんなものになつて  
るか気になるマミだった。

剣舞達は怯え（マミと杏子だけが）ながらもお化け屋敷を進む。

「妙にリアルじゃねーかよ、ここのお化け屋敷…嘗めてたわ…。」

「本当に力が入りすぎよ。ここのお化け屋敷は…。」

「一人とも何で俺に抱きついたままなんだ？」

剣舞はわざわざからマミと杏子に向で抱きつかれてるか分からなかつ  
た。

「抱きついてないと、あたしは死ぬんだよ…。」

「私もよ…。」

「えつ…？ どうなのか！？」

剣舞は抱きついてないと死ぬと言われ驚いていた。

しかし実際は抱きついてなくても死ない。

「お”れ”ば、プリ”ディ”オ”バゲエ”ハ”ハ”。」

何かを呟きながら顔が凄く気持ち悪く怖いお化けの作り物が出てきた。

「うざえ！？ 気持ち悪い！？」

「たぶんプリティとか言つてるけど全然プリティじゃないわよ…。」

「？」

「この形どつかで見たよ…。」

マリと杏子はお化けの気持ち悪い引き。剣舞はお化けの形を見て何かを思つ出していた。

「心臓に悪いわ、こりゃ… わたしと近づくな…。」

「同感だわ… 杏子…。」

「わざと出るなり何で入ったんだ？」

怖いもの見たわと言う奴だらう。

後は好きな男性に抱きつきたかったり。

それから剣舞達は様々な怖い仕掛けにびりながらもお化け屋敷の出口の近くまで来ていた。

「やつと出口ね…。」

「遠かつたよ…。」

「意外とリアルな物が見れて楽しかったな！」

「マミ」と杏子はやつと出口と安心しきっていたが…。

「ヴボアア…。」

「ギウアア…」

「オンドリルパキブシラクリカラスヘアップブルシケナト…。」

ゾンビがぞろぞろと色々な所から現れて寄ってきた。

「うひ、怖ええ…。」

「うひ、来ないで…。」

マミと杏子は怯えて動けなくなっていた。  
そんな一人を見た剣舞は二人を抱えた。

「ダッシュで行くぜー！」

剣舞は一人を抱え出口まで走って行き、お化け屋敷から出た。

お化け屋敷から出した剣舞達。マミと杏子は剣舞に抱えられてたので  
顔を真っ赤にしていた。

「次はジエットコースターにするんだよな。」

「う、うん…。」

「そ、そうね…。」

「二人とも何で顔を赤くしてんだ？」

「ここはお前のせいだよとツッコムべきだらう。」

ジエットコースターに向かつた剣舞達。ジエットコースターは幸い席が三つあるタイプなので醜い争いは起きなかつた。

「剣舞は真ん中ね。」

「何で真ん中?」

「いいから真ん中に座れ!」

剣舞は杏子に真ん中に強引に座らされた。

当然、マリと杏子は剣舞を挟む様に座つた。

「剣舞…手え握んど…。」

「私も握るわよ…。」

「別にいいけど?」

剣舞はマリと杏子に手を握られる理由は一人は怖いから自分の手を握つてると思つていて。実際はそれだけではないのだが…。

「おっ、発車するみたいだな。」

ジエットコースターは最初はゆっくりと進むが…後から一気に加速する。

「ぎゃあああああーー!」

「きやああああーー!」

「一人とも怖がりすぎじゃねえか?」

マリと杏子はジエットコースターが止まるまで剣舞の手をギュッと握り締めていた。

「もひ、特に行く所はねえかな？」

剣舞は楽しい所は大体行き着くしたなと考えていた。  
マミと杏子は顔を赤らめながら剣舞にある事を聞いた。

「な、なあ…剣舞。今日、あたしに抱きつかれたりしてどう思つた？」

「どうつて？」

「私や杏子とふれ合つてドキドキしたりしたか聞いてるの。  
友だちだからふれ合つのは普通じゃねえか？」

マミと杏子はそれを聞くとガクッとした。

明らかに友だち以上のスキンシップをしていると言つて劍舞の反応がこうだからだ。

「剣舞、最後に観覧車に乗ろつか？」

「あたしも賛成だ。」

「観覧車ってそこまで楽しくないと思つんだけじ…？」

「いいから…！」

「は、はい！」

一人の威圧に従うしかない剣舞だった。

マミと杏子は観覧車にて強行手段に出る気だった。  
鈍感な剣舞に自分達の思いを分からせるために。

「観覧車つて風景を眺める以外、特にないよな。」

剣舞がそうポツリと呟く。

剣舞がボーッと外を眺めているとマリと杏子が近づいて来た。

「んっ？な…ムグっ…？」

剣舞は何かとマリ達の方を振り向くとマリにキスをされていた。

次に杏子からもキスをされた。

マリと杏子は皿を潤ませながら剣舞を見た。

「これで好きって言つても友だちの好きじゃなって分かるよね？」

「あたし達は剣舞の事が好きだ…一人の女として。」

「！？！？！」

剣舞はいきなりの展開について行けなかつた。

混乱して頭がオーバーヒートしそうになつていた。

剣舞が混乱をしていると観覧車は一周して乗り場へとついた。

マリと杏子は自分達の行動が恥ずかしくなり走り去る様に観覧車から降りたが、剣舞はうつむきながら観覧車の中に居た。

「お姫さま…降りないんですか？次に乗られる方が居るんですけど…」

「…？」

「すいません…もう一周お願ひします…。」

剣舞が尋常じやないぐらに悩んだ顔をして言つとスタッフも次のお客様も何も言えなかつた。

「一人の女の子に告白されたのか俺？「うん、確かにされたよな…どうすりやいいんだ…誰か答え教えてくれえええ！…！」

剣舞はそう叫ぶが誰も答えを教えてくれる者は居なかつた。.

剣舞「誰か…誰か答えを教えてくれ…。」

作者「自分で見つけるしかないと思つ。」

ナツパ「とりあえず、お前は母親にボコられんのは決定だ。」

剣舞「俺はそもそもマミと杏子に好かれる事をしたつけ…？」

ナツパ「お前の親父さんも似たような事を言つてたな。答えは簡単、いつの間にかやつてたって事だ。」

剣舞「」

作者「悩み過ぎて壊れたか。」

ナツパ「ほつときや治んだる。」

作者「ではまた次回…。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9733z/>

---

魔法少女まどか マギカ ワールドオブメシア

2012年1月13日14時47分発行